

銭単位立山航空 55 円の適正 1 枚貼りカバーに、390 万円という値がつき世の収集家を驚かせたのは、2000 年 1 月のことである。それどころか戦後の航空切手の中には、適正使用例などオークションでも展覧会でも見た記憶がない、というような例がいくつもある。

しかしこのような化け物カバーなどなくても、個性あふれる魅力的なコレクションを作ることは充分可能である。本講演では、希品とされる使用例の紹介を含めながらも、それ以外に誰にでも楽しめる収集要素があることを、伝えていきたいと思う。

1. 概観

航空切手の収集において第一に頭に置くべきことは、当然のことながら、航空郵便に使用された姿である。さまざまな航空便カバーの収集が収集の柱となるのは当然である。

しかし日本切手の場合、航空切手とは収集家が勝手につけた名称に過ぎない。航空切手を一般の郵便に使うこともできたし、逆に一般の普通切手や記念切手を航空郵便に使うこともできた。日本の航空切手は、単に航空料金を支払うのに便利な普通切手にすぎない。

さらに言えば慣習上航空切手と呼ばれる切手の中には、事実上航空郵便に使用されることなく、他の郵便への使用を主目的として発行されたものすらある。それらの収集においては、同時代の一般普通切手「動植物国宝シリーズ」と共通の視点をもつことが重要である。しかし最近の日専では、一般の普通切手の記述が大幅に強化された反面で、航空切手の記述は昔のまま残されている。本講演ではそのデータの補強もしておきたい。

2. キジ航空

59 円の再版を除き一度限りの製造なので、製造面収集の楽しみはほとんどない。使用済切手での消印バラエティ収集から入るのが一般的であろう。この時期は欧文印の形態や印色に多くのバラエティがあり、これらを 1 点ずつ揃えていくステップは収集の醍醐味のひとつである。しかし最近では、単なる使用済単片にも万単位の投資を覚悟しなければならないことが多いのがつらい。



基本的なカバーも揃えておきたいが、その中には難物が多い。5つの額面は各地帯あての航空増料金に対応したものであるが、米国や欧州あての 59 円、103 円以外の 3 額面では、適正加貼便の入手は困難を極める。特に南洋諸島あての 34 円貼りは、筆者も 2、3 度しか拝んだ記憶がない。

しかしそのような教科書的な使用例とは違うものにも、目を向けておきたい。このキジ航空は、印面に AIR MAIL の文字が入っているにもかかわらず、他のシリーズと同様にどのような郵便に使用することもできた。外国あての船便に使用された例を示しておこう。



3. 立山航空（銭単位・円単位）

1951.12 に改定された国際航空料金の高額部分に合わせて発行されたのが、このシリーズである。円単位の 4 種に増刷分の銘版違いがあるが、収集の中心はやはり使用面である。

適正 1 枚貼りの中で、米国・欧州などあての 80 円貼り（第 3 地帯あて）、125 円貼り（第 4 地帯あて）は入手しやすい。しかし 75 円貼り（第 4 地帯あて印刷物）となるとかなりの努力が必要であり、冒頭でも触れた 55 円貼り（第 2 地帯あて）や 160 円貼り（第 5 地帯あて）、85 円貼り（第 5 地帯あて印刷物）は、幻の希品とも言える代物である。特に 85 円貼りは、この世に残されているかどうかさえ定かでない。



この時代の国際航空便は、封書と葉書が同額であったのが特徴である。しかし同じ料金を払うのならわざわざ葉書で差し出すのももったいない話で、葉書航空便の差し立て数は多くなかったようである。封書では平凡な 80 円貼り米国あても、葉書なると気の利いたマテリアルとなる。

さらには適正 1 枚貼り以外に、混貼の航空便や国内便にも目を向けておきたい。55 円や 75 円では、国内あての書留便や小包便に使用された例があり、その役割は普通切手「マリモ」「オオムラサキ」に引き継がれた。



4. 銭単位塔航空

このシリーズはやはり短期間にしか製造されていないので、使用面の収集が主となる。国内航空便用として発行されたという理解が一般的であるが、実際には国際航空便料金の低額部分や、速達・書留など国内特殊扱い便のために発行されたものと考えの方が、実態と合っている。30 円や 40 円については、そもそも国内航空料金に該当料金が無い。

実質は単なる普通切手であると言っても、やはり国内航空便カバーを入手したいものである。筆者は未入手なのでここに掲載することはできないが、1 年半以上使用された 25 円貼り封書には、わずかな入手可能性があると言えよう。

使用期間が短いので、使用例の入手には苦勞する。国内あての速達便 (25・30 円)、外国あての航空便 (25 円、30 円、40 円) などを通り入手するまでは何とかなるが、それ以外はなかなか難しい。国内航空便は別格としても、

15 円や 20 円は、気の利いた使用例を 1 点入手するにも苦勞する。図は 115 円航空便料金の



端数 15 円分として、銭単位 15 円切手を使用した使用例である。

5. 円単位塔航空

昭和 30 年代後期に発行された 15 円を除き、技術革新の昭和 20～30 年代に長期にわたって製造されたため、目打型式やグラビアスクリーン等のバラエティが多く、同時代の普通切手である第 2 次動植物国宝シリーズと同じ観点から、製造面の収集を楽しむことができる。日専の分類表にはスクリーンなどの項目がないので、より詳しい分類表を掲載しておこう。

	原乾板	シート	銘版	スクリーン	糊	用紙	普通櫛型		全型系			備考
							上抜	上下抜	普通	下抜 6	下抜 7	
15円	G	100	大蔵	260	AD	白			○		○	
		100	大蔵	260	PVA	白					○	
20円	P1	50	斤	200	A	粗白	○	○				
		50	大蔵	200	A	粗白	○	○				
25円	P2	100	大蔵	200	AD	粗白	○					
		100	大蔵	200	AD	白	○					
		100	大蔵	180	PVA	白	○					
30円	P1	50	斤	200	A	粗白	○	○				
		50	大蔵	200	AD	粗白	○	○				
	P2	100	大蔵	200	AD	粗白	○					
		100	大蔵	200	AD	白	○					
	G	100	大蔵	200	AD	白			○	○	○	
		100	大蔵	200	PVA	白					○	
40円	P	100	大蔵	200	AD	粗白	○					
		100	大蔵	200	AD	白	○					
		100	大蔵	180	PVA	白	○					
	G	100	大蔵	200	AD	白			○		○	
		100	大蔵	200	PVA	白			○		○	

このシリーズでは、初期の 20 円・30 円に見られる 50 面シートの存在が特徴的である。通常の 100 面シートを 2 分割して 50 面シートを 2 面配して印刷し、目打も 2 面続きのままで穿孔したため、上抜けと上下抜けのシートが存在する。理論上それらは同数存在するはずであるが、現実には上下抜けのシートの方がかなり少ないようである。2 分割してから目打穿孔したのも、存在するかも知れない。この 50 面シートの一部には、印刷庁銘がついていることも見逃せない。



25 円・40 円の後期 180 線スクリーンは、2 円秋田犬、50 円みろくなど同時代の一般普通切手で見られるものと同類である。25 円ではシェードにも違いがあり、単片使用済で入手する際の目安となる。目打バラエティの中では、30 円輪転版に見られる下抜全型 6 穴目打が特異的である。この目打は、もともと輪転凸版機に付随していた全型目打を扱いやすくするため下抜けタイプに変更する際、試験的

に 1 日だけ採用した目打型式である。この時期、他に 10 円ソメイヨシノにのみ採用されている。

使用面では、これらの切手が事実上国内航空便の制度廃止後に発行された点を認識しておきたい。早い時期に発行された 20 円には印刷物航空便の適応期間が 1 年あるが、その例を見た記憶がない。30 円は、銭位切手と同様に国内航空料金に対応していない。

20 円は昭和 20 年代に金色堂図案の普通切手に引き継がれたが、25・30・40 円の 3 種は長期にわたり、普通切手として大量に使用された。全期間を通してこれらの切手の主な用途は、国内あての速達便や、外国あて航空料金のうち立山航空や大仏航空でサポートされない低額部分であった。

昭和 30 年代後期になって発行された 15 円の用途は、外国あての船便印刷便である。他の額面でも、25 円の葉書（1961.10 料金）、30 円料金の封書（1959.4 料金）、40 円の封書（1961.10 料金）などで、飛行機の図案でありながら船便用として使われた。最後期に 1966 年の料金改正で生じた 15 円、25 円の国内便に使用された例も集めておきたい。

さらには 30 円切手の末期、速達加貼用として使用されていた時期に発行されたコイル切手にも、注目しておきたい。図は、この切手の唯一の機械発売局である京都中央消しの適正使用例である。



6. 大仏航空

145 円を除く 3 種は長期にわたって製造・使用されたため、製造面のバラエティが豊かである。日専のデータはやはり不十分なので、分類表をここに掲げておこう。△は文献には見られるものの筆者未確認のもの、?はその中でも疑問の多いものを表す。

大仏航空の 20 面シートはすべて 4 シートがけで印刷されたものと考えられている。昭和 30 年代中期以降は 4 シートがけの大判シートのままで目打穿孔したため、下端け・両抜けの目打バラエティが生

じた。80 円では、その際マーキング部の針を抜き忘れたために生じた 4 種の目打エラーがあることが名高い。しかしそれ以外にも、表に示したように多くのバラエティがあることに注目しておこう。

さらに 80 円では、シートによって銘版が著しく左右にずれたり傾いているものがある。銘版や定常変種による版の研究も進んでいる。



	スクリーン	糊	用紙	普通櫛型系						逆抜櫛型		備考		
				上抜	上下抜	上右抜	上左右抜	上下右抜	上下左右	下抜	上下抜			
70円	200	AD	粗白	○										
	200	AD	白	○	○						△	△		
	200	PVA	白								△	△		
	180	PVA	白	○	○						○	○		
	250	PVA	白	?	?						?	○		
80円	200	AD	粗白	○	?									
	200	AD	白	○	○									
	180	PVA	白	○	○	○	○	○	○					実用版1
	180	PVA	白	○	○						○	○		実用版2
	250	PVA	白								?	○		
115円	200	AD	粗白	○	?									
	200	AD	白	○	△									
	200	PVA	白	○	○									
145円	200	AD	粗白	○										

使用面では適正 1 枚貼りの中で 145 円貼りが難物であるが、80 円の第 4 地帯あて印刷物便はそれ以上の幻の希品である。同じ 80 円 1 枚貼りで、昭和 30 年代中期以降の第 2 地帯あてとは雲泥の差である。そもそも 80 円は、オフカバーの使用済切手ですら昭和 20 年代～ 30 年代前半の使用済をめぐったに見かけることがない。



70 円・80 円は、一般の普通切手として国内便にも多く使用されている。現金書留便や書留速達便が一般的であるが、それ以外にも小包便など特徴あるマテリアルの入手に努めたい。

筆者の HP <http://homepage2.nifty.com/~h-naga/yushu/index.html> では、戦後日本切手のさまざまな郵趣情報を公開しています。